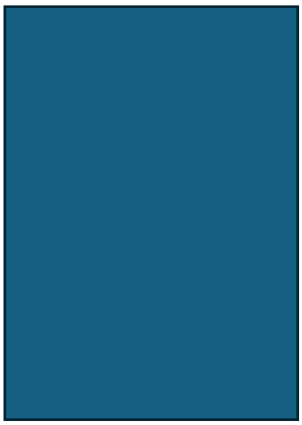
こんなものを読んできた（32）

あさりよしとお「アステロイド・マイナーズ」１・２（Ryu コミックス）

校長　鈴木　健

「アステロイド・マイナーズ」は、月から小惑星帯（火星と木星の間）へ進出していく宇宙開拓の歴史を、民間宇宙ロケット会社の技術者やパイロットと、宇宙鉱山会社の労働者の二つの視点から描いたオムニバス形式の作品集です。

この「こんなものを読んできた」では、いくつかの SF 作品を紹介してきました。SF と言ってもいろいろな作風がありますが、その一つに現実の物理法則や科学技術を踏まえて作品世界を構築する「ハード路線」というべきものがあります。「アステロイド・マイナーズ」は、かわいらしい絵柄にも関わらず、この路線の極致です。



この作品で描かれる宇宙は厳しい世界です。真空や強烈な放射線だけでなく、地球そのものが重力の重い鎖で人類をとらえています。

第５話「独裁者の幻想」では、ある国の独裁者が世界初の宇宙戦闘機を作ろうとします。アニメのガン〇ムなどでは、ロボットが宇宙を自由に飛んで戦っていますが、実際にはそれがどんなに大変か？というのがこの話のオチです。しかし、この独裁者の国を傾けるほどの宇宙戦闘機への情熱のおかげで、人類は地球周辺から小惑星帯へ進出できる技術を手に入れます。

第４話「小惑星の日」の主人公は小惑星（アステロイド）で資源を採掘する鉱山労働者（マイナーズ）の少年タカシです。タカシは、天井が低く遠くへ行こうとしてもすぐ行き止まり、空気も水もあらゆる物資が最低限の息苦しい採掘基地の生活から抜け出したくてたまりません。しかし、地球行きの切符は労働者が一生かかっても払えないほど高く、タカシはイライラを募らせる一方です…。

そんなわけで、このマンガでは宇宙は楽しい夢のある場所ではありません。特に鉱山会社の人々を描いた話では、ちょっと間違えただけで死んでしまう宇宙空間で、孤独や物資の乏しさに苦しめられながら働く労働者の生活がリアルに描かれます。しかし、作品全体を読み通して感じるのは「それでも作者は宇宙への憧れを持っている」ということです。

作者のあさりよしとおさんは、年齢が私より一つ上で 1980～９０年代の「オタク」ブームの頃、人気のあったマンガ家です。この世代は子どものころにアメリカのアポロ 11 号の月着陸を見ています。アポロ計画は当時のアメリカとソヴィエト連邦の冷戦の中で、アメリカの国威発揚のため無理やり実施されたものではありますが、それでも「人が月へ」というのはインパクトがあり、当時の子どもはみんな宇宙に憧れました。

最近の若い人たちの内向きな様子をみると、ちょっと怪しいかも知れませんが、私は「少しでも遠くへ」というのは、アフリカ大陸から始まって地球全体に広がった人類の本能に刻まれた願望だと思います。私の生きている間には無理でも、未来の人類には、月も火星も越えて遥か太陽系外までも行ってほしいと思います。